



Title	ハンセン病短歌の形成 : 内田守の熱情をめぐって
Author(s)	松岡, 秀明
Citation	Communication-Design. 2016, 14, p. 67-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55633
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ハンセン病短歌の形成：内田守の熱情をめぐって

松岡秀明（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD 招へい教授）

Formation of Leprosy *Tanka*: On Enthusiasm of Uchida Mamoru, M.D. and *Tanka* Author

Hideaki Matsuoka (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University; Visiting Professor)

内田守（1900～1982）は、1924年から1936年まで熊本のハンセン病診療施設である九州療養所に勤務した医師である。歌人でもある内田は、患者たちに短歌を詠むことを奨励し自ら指導にあたった。本稿は、ハンセン病患者に短歌の指導者としての内田、彼等の短歌を世に出した編集者としての内田、明石海人の歌集や小川正子の『小島の春』の出版に尽力したプロデューサーとしての内田、そしてハンセン病の歌人についての著書を出版した著述家としての内田に注目し、彼が九州療養所においてハンセン病患者の短歌にかかわった過程を追う。そして、その熱情は患者を精神的に解放しようとする内田のパターナリスティックな願望に裏打ちされていることを明らかにする。

Uchida Mamoru (1900-1982) is an M.D., who worked for Kyūsyū Ryōyōsho, a leprosarium in Kumamoto prefecture, from 1924 to 1936. Uchida, also as being *Tanka* author, urged inpatients to make *Tanka* enthusiastically. Focusing on his achievement as an editor and producer of leprosy *tanka*, this paper explores his enthusiasm for establishing this new genre was his paternalistic eagerness to save leprosy patients psychologically.

キーワード

内田守、ハンセン病、短歌、隔離
Uchida Mamoru, Leprosy, *Tanka*, Isolation

はじめに

「此の療養所の如きも比較的忘れられてゐますのは非常に遺憾であります。」こう書くのは、「此の療養所」に勤務する河村正之という医師である。この文章が公にされたのは1926年〔大正15〕8月10日¹⁾、「此の療養所」とはハンセン病診療施設である九州療養所、そして「忘れられてゐる」のは、社会からである（河村 1926: 序1）。

内田守（1900〔明治33〕～1982）は、熊本県立医大を卒業した1924年から1946年までの22年間を三つのハンセン病診療施設に勤務した眼科医であり、河村は内田が医師として初めて勤務したハンセン病診療施設である九州療養所の当時の所長である。内田は、ハンセン病の患者たちに短歌を詠むことを奨励し自ら指導にあたった。内田は、後に熊本刑務所で囚人たちに短歌指導も行なっている。歌人としては内田守人（もりと）の名で短歌結社水甕に

所属し、『一本の道』（1961）、『統一本の道』（1970）、『わが実在』（1974）あわせて三冊の歌集をのこしている。内田は本名の守とペンネームの守人を使い分けてさまざまな領域で文章を発表しているが、以下内田守で統一する。

私が注目するのは、しかし、歌人としての内田ではない。ハンセン病患者の短歌の指導者としての内田、彼等の短歌を世に出した編集者としての内田、明石海人の歌集や小川正子の『小島の春』の出版に尽力したプロデューサーとしての内田、そしてハンセン病の歌人についての著書を出版した著述家としての内田である。こうした観点から内田をとらえた研究として、主として1930年代後半の内田について論及している荒井の著書〔2011〕と、1930年代前半までの内田の営為を詳しく追った馬場の論文〔2000〕がある。本稿は、内田が九州療養所に勤務した1924年〔大正13〕から1936年までを対象とする。

療養所のハンセン病患者を外部の人に繋げることを目的として内田が短歌を奨励したことは馬場が指摘しているが、本稿は内田のハンセン病患者の短歌への関与を経時的にたどりながら、これまでに論じられていない内田の思想と戦略と明らかにする。

1. 内田守の生涯

内田のハンセン病患者の短歌に対する考えを理解するためには、その生涯を概観しておくことが不可欠である。以下、内田の自伝的な記述が含まれている著書『生まれざりせば』〔内田 1976〕と、内田の伝記的事実の詳細な記述がある馬場純二の「医官、内田守と文芸活動」〔馬場 2000〕を適宜参照しつつ、内田の一生を概観しておきたい。

1900年（明治33）6月10日、内田は熊本県菊池郡泗水村（現菊池市）で父常平、母波津の3男として生れた。1919年（明治33）県立中学済々黌を卒業し、旅順工科学堂電気科に入学する（馬場：21）。しかし、長兄が夭折したため同校を退学し、1920年（大正9）私立熊本医学校（熊本県立医学専門学校、熊本県立医科大学を経て、現熊本大学医学部）に入学する

内田がいつ短歌を詠むようになったかは明らかでないが、旅順工科学堂時代にすでに、短歌をつくっていたようである（馬場 2000: 21-22）。熊本へ戻って医学を学ぶ間は、内田は短歌誌『人間的』の発行にかかわっており（内田 1926b: 89）、「地方家人としてやや知られていた」と自ら述べている（内田1976: 8）。

1924年（大正13）3月熊本県立医科大学を卒業した内田は、同年4月にハンセン病の診療機関であった熊本県菊池郡合志村（現合志市）の九州療養所に医局員として赴任する。1927年春には、1914年〔大正3〕に設立された短歌結社水甕に入っている。内田は、設立時の主要メンバーの一人で結核の療養中だった岩谷莫哀（1888〔明治21〕～1927）を病床に訪れ、「弟子入りをした」としている（内田1974: 9）。九州療養所に勤務するかたわら、母校で加

藤七三教授に師事して生化学を、鹿児島茂教授からは眼科学を学び、1934年に博士論文「鼠癩の眼疾患に関する研究」で熊本医科大学より医学博士を授与される。1936年、内田は光田健輔が園長を務めていた長島愛生園に転じて医務課長となる。患者の明石海人や医師の小川正子とは、この長島愛生園で出会い、彼等の著作の出版に尽力している。1942年には、青森の国立療養所松丘保養園の医務課長として赴任するが、健康を害し療養に専念する。

1946年に松丘保養園を辞して熊本に戻った時、内田の後半生は始まる。医院を開業した内田は、社会教育、純潔教育、学校保健にも携わる。1950年には熊本短期大学講師となり、後に教授、同短大付属社会福祉研究所の初代所長に就任している。熊本短期大学では、社会福祉を研究し講じるとともに、水俣病についても積極的に調査を行なった。1971年、厚生行政事務および教育功労者として勲四等瑞宝章を受けている。1973年、同短大を定年退職すると西九州大学教授に就任し、翌74年社会福祉学科の開設とともにその学科長となる。この間、熊本刑務所で囚人たちに短歌指導を行ない、囚人たちの短歌を集めた合同歌集『壁をたたく者』（1964）を編集している。内田は、蒐集したハンセン病や社会福祉にかかわる文献資料を、熊本県立図書館と西九州大学に内田文庫として寄贈した。1982年1月17日、内田は81歳の生涯を閉じている。

以上のような内田の経歴をみると、内田が一貫してハンセン病患者や囚人という社会的弱者に短歌を詠むことを勧めてきたことが了解される。そして、内田こそハンセン病短歌というジャンルが確立されるのに決定的な役割を果たした人物なのである。

2. 九州療養所の概観

1909年4月1日、日本で最初のハンセン病患者のための連合府県立の公立診療所が全国5箇所（青森、東京、大阪、香川、熊本）に設置された。九州療養所の前身は、1909年4月1日に開設された九州七県連合立九州らい診療所（収容患者定員150名）で、1911年3月30日には九州診療所と改称している。1941年、国へ移管され国立療養所菊池恵楓園と改称されて現在に至る²⁾。

前節で示したように、内田が熊本の九州療養所に赴任したのは1924年（大正13）4月だが、当時は300名ほどの患者が入院していたという（内田 1976: 8）。同年の11月29日九州療養所に入った鳥田尺草（歌人 本名大島数馬）によれば、診療所は黒石原という「東に遠く阿蘇を望み鬱蒼たる櫟林に囲まれて閑寂限りなき高原」にあった（鳥田 1939: 3）³⁾。熊本医大教授加藤七三は、「夜の山の如くに黒い大きな檜の森があり、其森かげ雑木林のなかに九州療養所は静かに横つてゐる」と描写している（加藤 1926: 37）。そして内田は、「冬は北風の強いところで長い霜柱がよく立」ったと述懐している（内田 1976: 34）。これらの記述

から、当時の療養所をとりまく自然環境をうかがうことができる。

では、療養所の社会的な環境はいかなるものだったか。内田は当時書いた文のなかで、患者たちは「殆ど絶対隔離とも云つていゝ」状況に置かれていると記している（内田 1926b: 87）。つまり、患者たちが療養所の外へ出るのはほぼ不可能であった。では、療養所を訪れる人はどうか。内田によれば、「病者への訪問客は肉親者が稀に来るが、一般社会人としては宗教家」が月に一回くらい一、二名ほど訪れるだけに過ぎなかった（内田 1976: v, 8）。

人的な交流のみならず、メディアを通じた文化的な交流も限られていた。「図書室には五～六十冊の小冊子しかなく、病者の精神文化は全く閉ざされていた」と内田が述べるように（内田 1976: 8）、外部から情報が書籍によつての療養所へもたらされることもあまりなかったようである。すなわち、九州療養所の患者たちは地理的にも社会的にも社会からは孤立した状態にあった。

このような空間から、患者たちの短歌が療養施設の外に向かって発信されるようになったのはいつ頃なのか。そして、九州療養所に限らずハンセン病療養施設一般における患者の手になる短歌や俳句、すなわちいわゆる短詩形文学はいつ頃まで遡りうるか。以下の節で、これらの問いを検討していく。

3. 九州療養所における俳句会の誕生

光田健輔は、1931年から57年までの長きに亘って国立のハンセン病療養施設である長島愛生園園長を務めたが、1909年に東京のハンセン病療養施設である公立の全生病院の開設された際、初代の医長に就任している。光田は、公立療養所の患者について、「その初期に於いては其の教養に於て境遇に於て、肺病の人と雲泥月鼈の差であった」と回想している（光田 1940: 2）。内田も、1926年に書いた文のなかで、九州療養所の患者たちの「学力の程度」について、「総じて教育の程度低く尋常小学校を卒業してゐない者もある」としている（内田 1926a: 5）。後述するように、このような状況のなかで句会が行なわれていたのだった。九州療養所の入所患者たちにとって、それは例外的な文化活動だったと考えられる。

内田が九州療養所に着任した時には、「既に10年の歴史を有する『檜の影』会と称する俳句の団体」があったという（内田 1926a: 4）。内田は、この「檜の影」会が「河村所長保護の元に吉武月次郎氏や宮部寸七翁氏の指導を受けつゝ、相当の進歩を続けてゐる事を知った」と記している（内田 1926a: 4）。

吉武月次郎（1882? [明治15?] ~ 1940）は福岡県に生まれ熊本に住んだ俳人で、没後の1976年に句集が出されている。一方、宮部寸七翁（本名逸夫、1887 [明治20] ~ 1926年 [大正15]）はジャーナリストであり、九州立憲新聞を経営した後博多毎日新聞の編集長を

務めた。1916年（大正5）に結核を発病するが、この頃より句作をはじめ『ホトトギス』などに投句した。1929年には、句集が没後出版されている。内田は、療養所の句会に「所外の指導者も時折は来てくれる」ようになったと記している（内田 1976: v）。「所外の指導者」とは、吉武や宮部であろう。それがいつ頃から行なわれるようになったかを内田は書いていないが、彼らは定期的に九州療養所を訪れて患者と接していたのであり、俳句は療養所と外の世界をつなぐものだった。

以上みてきたように九州療養所の患者の間では、短歌に先立って俳句が行なわれていた。俳句がどのように行なわれるようになったかについて、内田は「農村に温存されていた俳句運座が療養所内に持ち込まれ」たとしている（内田 1976: v）。『俳文学大辞典』によれば、「運座」とは「数人が集まり、席題によって句を詠み合い、選をする方式」で（尾形他編 1995: 92）、現在の句会に通ずる集まりである。どうやら俳句は、患者たちの間で自発的に作られるようになったようである。

内田が九州療養所に赴任するよりも前に、かなりの数まとまっていた患者たちの俳句をある人物が出版しようとしたものの、資金難で結局うまくいかなかったという（内田 1976: v, 34）。所長の河村が新たに着任した内田に出版を依頼し、内田は「二年間待って戴いたら、短歌と一緒にして出版しましょう」と約束した（内田 1976: v）。そして、内田はこの約束を守った。

4. 九州療養所における短歌会の出現

短歌を詠むことが九州療養所の患者の間で行なわれるようになったのは、1924年（大正13）と考えるのが妥当である。内田は次のように書いている。

二三回句会に出席してゐる中にさびしがつてゐる彼等は、何時の間にか私が短歌を作ることを知つて短歌も教えてくれと云い出したので、私は欣然として短歌会を始めた。（内田 1926a: 4）。

句会とは、「檜の影」会の句会である。先述のように医学生時代に短歌雑誌『人間的』にかかわり「地方歌人としてやや知られていた」という内田は、患者たちに短歌の指導を請われたのである（内田 1976: 8）。内田主導で九州療養所で毎月行なわれるようになった歌会には、「二十人くらいの出席」があったという（内田 1976: v）。

月例歌会が行なわれるようになってから「間もなく謄写ずりの『檜の影』を発行し、俳句の方を宮部氏に指導して貰ひ短歌の方は専ら私が指導して知人の間に頒布していた」と内田は書いている（内田 1926a: 4）。現存する『檜の影』で最も古いものは熊本県立図書館所蔵の1925年（大正14）1月発行の第2巻1号であり、ここから逆算すると『檜の影』は1924年

(大正13)、すなわち内田が九州療養所に着任した年に創刊されたことになる。先に引用した、短歌会を始めて間もなく謄写版刷りの『檜の影』を発行した、という内田の文言にも符合する。ガリ版刷りであることから発行部数も少なく、「知人の間に頒布」されていたとのことなのでその流通範囲はごく限られていたであろう。とはいえ、内田が指導する歌会でつくられた短歌、宮部寸七翁が指導する句会で作られた俳句を掲載するために創刊されたこの『檜の影』は、ハンセン病患者の短歌や俳句が療養施設の外部の者たちの眼に触れる機会を提供したのである。

俳人の宮崎草餅は、1926年春に宮部寸七翁が急逝した後、「檜の影」会の選句を担当するようになったが、これより以前からハンセン病患者の俳句を、宮部が選をしていた『『檜の影』会誌又は立憲新聞等を通して、見てみた』と記している(宮崎 1926: 85)。九州療養所の短歌・俳句誌『檜の影』(詳細は後に記す)の創刊は、上に述べたようにおそらく1924年[大正13]である。一方、「立憲新聞」とあるのは1913年[大正2]創刊の九州立憲新聞と考えられる。『檜の影』は、この新聞にはハンセン病の患者たちの句が定期的に掲載されていたものと推測されるが、それがいつから始まったのかは不明である。したがって、現時点では、九州療養所の患者たちの句が印刷されて療養所の外で読まれたのは1924年[大正13]まで遡ることができる。

『檜の影』1929年1月号に寄せた「檜の影一月号を祝して」と題された文で、所長の河村は患者たちを次のように叱咤激励する。

「檜の影」同人よ文学芸術は病苦の人にも恵まれてある住常座臥心眼を開いて森羅万象を達観諦聴せよ(河村 [1020] 1935a: 45)。

瀦堂という雅号で南画をよくした河村は、芸術に理解を示した⁴⁾。文芸に理解を示すこの所長のもとで内田は存分に力を発揮し、『檜の影』は順調に発行されていった。1930年には「慰安会自治会並に各員の努力によつて活版印刷機が購入」され(河村 [1020] 1935b: 46)、5月号からは活版で印刷されるようになった。翌31年には、俳句が独立し宮崎草餅を選者とする月刊の俳句誌『草の花』が創刊され、『檜の影』は、内田が選者の短歌、創作、詩、児童の作品等々の掲載する文芸雑誌となり、1941年に施設が国立に移管されその名が国立療養所菊池恵楓園となった後も継続され、1969年の第43巻まで刊行された。

5. 合同歌句集『檜の影 第1集』の出版

九州療養所の患者たちの短歌や俳句を収めた活版印刷の合同歌句集『檜の影 第1集』が発行されたのは、1926年[大正15]8月10日である。発行者は所長の河村正之、発行所は、熊本県菊池郡合志村九州療養所檜の影会となっている。初版は500部で、45名の短歌260首、

37名の俳句425句を収める。先述のように、この合同歌句集は、内田が尽力して刊行にこぎつけたものである。

謄写版印刷ではなく活版印刷なので、当然ある程度の出版費用がかかる。それは、内田が学生時代にかかわっていた短歌誌『人間的』の残金50円、九州療養所の慰安会から30円、河村所長、内田の恩師で熊本医大の生化学の教授で歌人でもある加藤七三らの「ポケットマネー」によって賄われた。内田は第一集の刊行時点で既に第二集の出版も視野に入れており、第一集「初版500部の売上高は将来第二集及び其の他の出版費用にあてる考へである」と記している（内田 1926b: 89）。

内田は、この出版を支援する人々も集めることにも尽力している。『檜の影 第一集』の巻末には賛助員の名前が掲げられているが、その数は45名にのぼる。九州療養所で俳句の指導にあたっていた吉岡禅寺洞、吉武月次郎が名を連ねる。短歌では、先に紹介した加藤七三熊本医大教授、松田常憲（1895〔明治28〕～1958）も賛助員に名を連ねている。松田は、『水甕』の編集を行っていた岩谷が結核で1927年に亡くなった後に『水甕』の編集に携わるようになった人物で、後に述べるようにハンセン病の患者の短歌を支援した。高野六郎も賛助員となっている。よく知られているように、高野はその後厚生省予防衛生局在職中にハンセン病患者の絶対隔離を推進した人物である。高野は歌人でもあったので、賛助員となることに応じたと思われる。

賛助員のなかで、現在でも広く知られている歌人や俳人としては、宮崎出身の歌人若山牧水（1885〔明治18〕～1928）と俳人の飯田蛇笏（1885〔明治18〕～1962）があげられる。牧水はこの時すでに著名な歌人だったが、蛇笏は当時まだ無名だった。この二人がどうして賛助員となったかは不明だが、内田が知っていて依頼したのかもしれない。もし、牧水を賛助員としたのが内田だとすれば、将来発揮される卓越したプロデューサーとしての才能の片鱗がここにあらわれているといえるだろう。

内田をこの歌句集の出版に駆り立てたのは、患者たちを世の人に知ってほしいというパターナリスティックとも捉えられうる欲求である。内田は、患者たちが社会から忘れられる傾向にあることに対して、二つの理由を考える。第一の理由は、彼らが隔離されていることである。すなわち、物理的に人目につかないということである。第二の理由として、内田は、彼らが「自ら認識して人間的な苦悩を進んで世人に訴ふることが少なかつた為ではあるまいか？」と問う（内田 1926b: 88）。つまり、患者は自らの現状を努力して世に伝える必要があるのではないかと内田は考えるのである。内田がこのように考える背景には、「同じ人間であれば溺れんとして救を求めている者を見過ごすことは出来ない筈である」という性善説がある（内田 1926b: 88）。

内田は、ハンセン病患者が自らのことを世の人々に知ってもらうには文芸が適切だとする。

余りに悲惨すぎる彼らの肉体と生活とは、其儘一般の人達に受入れられにくいのはまたやむを得ないことも知れない。此処に於て私は彼らの生活や感情を芸術化したる文芸作品は彼等の生活を紹介し感情を訴ふるに最も当を得たものではないかと思ふ（内田 1926b: 88）。

では、このような内田の意図が反映している『檜の影 第一集』はどのような読者を獲得したのか。1929年に出版された『檜の影 第二集』には、巻末に附録として第一集に対する書評が三本収められている。評者は、画家で歌人の津田青楓、評論家・作家の石丸悟平、医師で歌人の対馬完治である。石丸悟平（1886〔明治19〕～1969）は、「私は涙なしではこれを読むことができませんでした」と書いている（石丸〔1926〕1929: 99）。この『檜の影 第二集』の「巻末附記」に、内田は、第一集は、「皆様より非常なる讃辞と激励の言葉を受け、又各地の新聞雑誌に広く紹介されたと記している（内田 1929: 93）。また、第二版が出されていることから（下瀬 1935: 頁番号なし）、初版500部はすべて献呈されたり売れたものと考えられる。すなわち、『檜の影 第一集』の出版は社会にハンセン病患者の存在を認識させるという点ではひとまず成功した。

6. 外部との交流

先に見たように、『檜の影 第一集』はある程度注目された。しかし、内田は歌壇からの反応が乏しかったことに対して不満感をいだいた。

私が少し残念に思ひましたことは、現在自分で歌を詠んでゐる人より、もすこし位は顧みていたゞけるだらうと期待してゐましたが、余り頼もしいお言葉を承はる事が出来ませんでした（内田 1929: 93-4）。

『檜の影 第一集』の書評で、画家の津田清楓（1880〔明治13〕～1978）は、患者たちの歌を「無技巧」だが感動的（内田1929: 98）とし、医師の対馬完治（1890〔明治23〕～1975）は、より手厳しく「芸として鑑賞する事は或は無理であるかも知れぬが…（出版は：松岡補足）意義ある事」と評価している。（内田1929: 100）。この二人は歌人でもあり、歌壇の見解はこの二人の評価と大きな相違はなかっただろう。つまり、表現として貴重ではあるが短歌としてはどうかということである。

内田は、患者たちに歌壇でも評価されるような短歌を詠んでほしかった。『檜の影 第一集』に収められている短歌は、短歌を作り始めてから2年以内につくられたものであり（内田 1929: 94）、「短歌の手ほどきの時代」の作品である（内田 1926a: 5）。そこで、内田は、「病歌人達が本格的に勉強するならば、出来るだけ早く中央誌に入会させた方がよいと思った」と考えた（内田 1976: 145）。内田は彼らに、加藤七三が主宰を務めていた『胎』や、齋

藤瀏がかかわっていた『熊本歌会雑誌』に患者たち全員の作を発表させてもらったという（内田 1929: 94）。それだけではなく、患者たちを促して、内田が「中央誌」と呼ぶ歌誌にも短歌を投稿させた。

中央では「短歌雑誌」「水甕」及び「アララギ」等に投稿して相当の成績を挙げつゝあります（内田 1929: 94）。

先に引いた内田の文言のなかに「『水甕』その他の中央誌に加盟する者が出始めた」とあるが（内田 1976: 146）、この「中央誌」という言葉は興味深い。内田は、『胎』や『熊本歌会雑誌』といった熊本あるいはせいぜいその近県で流通している歌誌に対して、全国的に流通している結社誌の意味で内田はこの言葉を用いているのである。この用法の背後には、療養所を辺境、結社誌を中央とする考えがある。事実、療養所は辺境にあった。言うまでもなく、結社誌は場所ではなく雑誌なのだが、権威をあらわすものと捉えられているのである。

1928年には九州療養所の患者のなかに、その中央の短歌結社に参加する患者が現われた。第1節で述べたように内田は1927年春短歌結社水甕に入っているが、1928年6月に島田尺草以下5人の患者を水甕に紹介したのである（内田 1976: 10）。一般的に短歌結社は結社誌を発行しており、会員が編集部へ郵送した短歌を選者が読み掲載する歌を決めるというシステムを採っている。水甕も毎月結社誌『水甕』を発行していた。したがって、九州療養所の患者は歌稿を郵便で送っていたことになる。このことについて、内田は次のように記している。患者が直接書いた原稿を机上に置いたり、手に触れたりすることは気持ちが悪からうから、全文内田が浄書して送ることを（入会の：松岡補足）条件とした」と（内田 1976: 10）。療養所のなかのハンセン病患者の短歌が全国的に流通するようになったという点で、彼らが短歌結社に受け入れられたことは画期的な出来事であった。

一方、当時齋藤茂吉が指導的立場にあって歌壇で隆盛を極めていたアララギに入った患者も現われた。九州療養所の患者野添美敏は、1928年7月頃アララギに入り「熊本のアララギ会員、林實一、丹治千恵子諸氏等と交友を結」んだとされる（加藤 1933b: 632）。もし野添が林や療養所を訪れて丹治と会ったとすれば、肉親以外のものが療養所を訪れたことになり、稀な出来事だったといえるだろう。

もう一人アララギに入った九州療養所の患者をあげておく。1923年（大正12）頃九州療養院に入った石川孝（1906〔明治39〕～1930）である（内田 1940: 194）。内田が1924年に設立した檜の影短歌会で、「もっとも若き俊英として、彼の存在は光っていた」という石川は（内田 1940: 194）、野添に「歌の発表機関」を得たいと相談した。野添がアララギの主要メンバーだった土屋文明に、一人分の会費で野添と石川の投稿を認めてほしいと懇願したところ許されたという美談を、加藤七三が紹介している（加藤 1933b: 632）。石川は、1929年5月頃から『アララギ』に投稿を始めるが、1930年4月に25歳で亡くなった。

7. 合同歌集『檜の影 第二集』の出版

『檜の影 第二集』は、1929年12月10日に刊行された。短歌と俳句を収めた第一集とは異なり、第二集は短歌のみの合同歌集となっている。奥付には、編集兼発行者は河村正之となっているが、表紙では「内田守人編」とされている。発行所は、熊本県菊池村合志町九州療養所官舎内内田方 檜の影発行所、となっており、内田が本書の刊行を仕切っていたことが伺われる。

この第二集に「序」を寄せているのは賀川豊彦と石井直三郎、「跋」は齋藤瀏と加藤七三が書いている。彼らがどのような立場にあったかは後に記すとして、文の内容を検討してみたい。序や跋であるから、当然のこととして彼らは『檜の影 第二集』を讀んでいる。賀川は、短歌を詠む患者たちを「病む身にも猶その心持を表現して、創作の喜びに人生の悲しみをうちかけて行く人々」と呼び、「隠れたる石川啄木も居れば、匿れたる正岡子規も沢山居る様である」と述べる（賀川 1929: 1）。「多くの作者はさうした寂しい境涯にありながら、静かに自己を守り自己を育みつゝ、精神的なあるものへの精進をつづけてゐる」と賞賛するのは石井である（石井 1929: 4）。一方、齋藤は自分が「所謂歌人なるものゝ歌より此の集の歌に多く心を惹かれる」のは、それが「何等の野望なく、遠慮なく、誇張なく、其の感ずるまゝを率直に歌に表現した真実なる心の叫びだから」と考える（齋藤 1929: 89）。

だが、その後のハンセン病の短歌の展開を考えた場合、最も興味ぶかい発言をしているのは、加藤である。

我歌道は我建国三千年來の精神であつて、畏くも 陛下の御前に於ける新年御歌会の盛觀の如き、世界たぐひなき崇高優雅なる御儀式であり、そしてこれにみるが如き我同胞皆人の歌心の発露こそ「檜の影」を生んだ根本的素因ではあるが、然し内田君の如き医師で兼て歌人である人が九州診療所になかつたならば、いかでか我々はこの驚異すべき歌集の誕生に接することができようか（加藤 1929: 91）。

まず注目すべきは、天皇に言及している点である。なるほど、短歌は天皇と直接的な関係を持っている。そして、加藤は「我同胞皆人の歌心の発露」と書くことによって天皇からハンセン病患者までの連続性、すなわち歌心をもつ人間ということを示しているのである。これは、当時としては画期的な見解ではあるまいか。

引用した部分でもうひとつ重要なのは、医師であり歌人である内田に対する評価である。上の引用で加藤が述べるように、内田が九州診療所にいなかったとしたら、たしかに『檜の影 第一集』『檜の影 第二集』どころか、謄写版の『檜の影』もつくられなかったかもしれない。プロデューサーとしての内田の能力は、きわめて高いと言わざるをえない。

その能力は、序と跋の執筆者の人選にも示されている。内田が彼らを選んだのには、ある思惑があったと考えられる。恩師でもあり九州療養所の患者たちの短歌に関心を持っていた加藤は当時隆盛を誇った短歌結社アララギに属していた。当時退役し予備軍人として熊本市内に住んでいた齋藤は、陸軍大学卒のエリートの元陸軍少将である。齋藤はまた歌人でもあった。佐佐木信綱が主宰する日本で最初の短歌結社心の花の属しすでに歌集を一冊出していた齋藤は、「かねてから『熊本歌話会雑誌』誌上にて『檜の影』の人々の歌を熱心に指導」していたのである（内田 1929: 97）。石川は、『檜の影』同人のなかの何人かが参加していた短歌結社水甕の主宰である。こうしてみると、4人中3人が有力短歌結社の実力者なのである。残る一人の賀川だが、彼はクリスチャンで、1925年に設立された日本救癩協会（日本MTL）の幹部の一人としてハンセン病にかんして大きな影響力をもっていた⁵⁾。内田は、彼ら「御願ひする為に約半年を要し」と記しているが（内田 1929: 96）、短歌界に影響のある人物の序や跋を配することで『檜の影 第二集』が歌壇で注目されるように配慮したと考えるのが妥当であろう。

8. 社会の認識と解放：内田の情熱と戦略

「はじめに」で引用した河村の文は、『檜の影 第1集』に彼が寄せた「序」からのものだが、同じ文のなかで河村は次のようにも書いている。

患者達の生活や感情をありのままに社会に紹介するには、何うしても彼らの感情の発露した文芸作品によるのが最も当を得てゐるように思はれます。此の文芸作品によつて患者達が赤裸々な感情を社会に訴へて社会の反響と同情とを得ますならば、それが当面の最もよき慰安であり救であります。（中略）此の意味で私は数年来患者達の文芸趣味を奨励してきました（後略）（河村 1926: 1）。

ここには、当時の隔離される側—すなわちハンセン病患者—の短歌と俳句に対する隔離する側の眼差しが端的に示されている。社会から顧みられない患者たちの生活や感情を当事者でない者、すなわち世間に知ってもらい「反響と同情」を獲得することで、当事者たる患者は救済されるという論理である。

内田は、この論理を現実化するのに適切な人物だった。内田を衝き動かしていた欲求は河村のそれと同質のものであり、それは二つに分けることができる。ひとつめは、世間の人々に療養所のハンセン病患者の生そして苦悩を少しでも理解してほしいという願いである。1926年、内田は次のように書いている。

（松岡補足：ハンセン病患者たちが）今迄斯く世の同情ある方面からも比較的忘れられ勝となつてゐたのは彼等が隔離されてゐて世人の眼に触れにくかつた事にもよるが、又

一つは患者達自身が自ら隠認して人間的な苦悩を進んで世人に訴ふることが少なかつた為ではあるまいか？（内田 1926b: 88）

ハンセン病患者が世間から忘れられた存在であるという認識は、少なくとも内田の周囲の医師である河村と加藤に共有されていた。

1924年〔大正13〕春に生化学の教授として熊本医大に赴任した加藤は、その夏まで熊本にハンセン病の施設があることを医師でありながら知らなかったことを告白し、「男女の患者が泣きぬれた生活を営んでいる事は余りに日本人々から忘れられ勝ちである。自分の亦嘗てはその一人だったのだ」と記している（加藤 1926: 37）。また、「はじめに」で引用した九州療養所所長河村正之の発言も、同様の見解を示している。

ふたつめは、ハンセン病患者の「精神的解放」そして「更生」である。1926年、内田は『檜の影 第一集』の巻末附記で「癩患者の精神的解放に努力」したいと宣言している（内田 1926b: 89）。そして、1929年には、『檜の影 第二集』の巻末附記に次のように記している。

肉体的に社会との接触を断たれたる病者達が精神的に解放され、人間らしい気持を味ひ得るには、信仰に自己の全部を更生させ得る人は別として、文字によって表現されたる文芸作品によつて社会の人と間接的に語るより仕方がないのであります（内田 1929: 95）。

この箇所には、短歌による患者の社会との接触と精神の解放という内田の考えが端的に現わされている。後に内田はこうも述べている。

家を追はれ社会と絶縁されてある彼等の、精神的に生きる道は全く塞がれてゐたが、文芸作品による社会との交歓は、漸く彼らにゆるされたる唯一の精神的更生の纜である（内田 1940: 221）

内田の文脈で、「更生」という言葉は精神的、そして社会的に立ち直ることを意味している。内田は、九州療養所に赴任して2年後の1926年に、患者は「神の摂理に漏れたる彼らの運命は全く生ける屍」であり、「彼等の運命は全く社会の文運から取残された観がある」と捉え、その毎日の生活は「実に乏しい単調なるものである」とし、「宗教家の愛の手も充分に彼らを救ふことは出来ない」と断言している（内田 1926b: 87）⁶⁾。内田は、短歌による彼らの救済に邁進したのだ。

おわりに：なぜ短歌か

短歌や俳句は、病者の文学としての性格を持ちうる。「療養短歌」および「療養俳句」は、文字通り病む人々が療養中に詠む短歌や俳句を意味している。病気としては、結核とハンセン病が代表的である。

結核では、明治大正期の歌人として正岡子規（1867〔慶応3〕～1902〔明治35〕）、石川啄

木（1886 [明治19]～1912 [明治45]）、山川登美子（1879 [明治12]～1909 [明治42]）、松倉米吉（1895 [明治28]～1919 [大正8]）らがいる。昭和の歌人では、滝沢^{わたる}亘（1925 [大正14]～1966 [昭和41]）相良宏（1925 [大正14]～1955 [昭和30]）らが結核で斃れている。ハンセン病の歌人としては、明石海人（1901 [明治34]～1939）、伊藤保（1901 [明治34]～1963）、島田尺草（1904 [明治37]～1938）らが知られている。俳句では、結核の石田波郷（1913 [大正2]～1969）が著名である。

これらの病気の治療は専門の施設で行なわれることが多かったが、そこで短歌や俳句がつくられていった。小説が一定の時間集中しないと書けないのに対し、短歌や俳句は短時間でつくることができる。この手軽さが、療養する人たちに受け入れられた大きな要因と考えていいだろう。また、他人の短歌や俳句を読み批評をする集まり、すなわち歌会や句会が形成され、その会誌が発行されるようになることも稀ではなかった。

短歌・俳句とその作者の関係について、松田修は次のように論じている。

和歌＝短歌、連歌＝俳諧のごとき、短詩型文学のばあい、一首・一句が自立的宇宙であるとしても（あるいはあればあるほどに）、それらを統合する求心的力学として、作家の（作家名の）登場がしばしば要請されるだろう。その点、作品と作家の連帯というか、結合というか短詩型文学におけるかかわりには、小説や物語とはレベルをことにした体質がたしかにある（傍点 松田）。実名であれなけれ、すでに固有名詞で作品＝作品集に臨んでいる以上、男性か、女性か、二十歳か、三十歳か、家庭は、子供は…、とふみこんでゆかざるをえぬことにもなるのだ。（中略）そして踏みこみによって明らかになる部分がたしかにあるのだ（松田 1980: 142）。

松田は、近代以前の和歌や俳諧も射程に入れて論じているが、少なくとも近代以降の短詩型文学においてこの主張は妥当である。長きに亘って引用したのは、短歌と俳句の短詩型文学では、一首・一句が作品として独立していても、作家の生を知ることによって作品をより深く理解できるようになることを松田が的確に指摘しているからである。逆に言えば、短歌や俳句は作家の生をよりいっそうの奥行きをもって把握する導きの糸となりうるということだ。

さて、近代以降の短歌と俳句では重要な差異がある。たとえば上田三四二が論じるように、短歌は主観的であり、俳句は客観的である（上田 1959: 11）。「作中主体」とは、ある短歌を詠んだと考えられる主体を表す言葉である。近代短歌は基本的に一人称の文学であり、歌の中に登場するかいなかにかかわらず、読者はこの作中主体の存在を意識する。ある短歌に二人称の「あなた」や三人称の「彼・彼女」しか登場しなくても、その「あなた」や「彼・彼女」彼らを認識している主体がいるし、叙景歌でもその風景を見ている主体が存在する。この主体が「作中主体」と呼ばれているのである。そして、作中主体は歌人その人であるのが一般的である。したがって、個人が病いをどのように経験するかを検討する際に

は、俳句より短歌の方が相応しいと言える。

内田はこのことをよく理解しており、「短歌が俳句に比して這入りやすく俳句より叙情的である」とすでに1926年に述べている（内田 1926: 5）。また、後年には「俳句より短歌の方が叙情的であり、病者の病床詠嘆としては短歌が便利である」とも記している（内田 1976: v）。

文芸を通じて社会の人達に社会の人達に親しく呼びかけることが出来、自然の風光をに親しみ、自らを労わりつゝ生ける歓を感じ行くことが出来る。其処には自ら彼らの真実なる情感が発露し其の人格が現はれてくる。此の文芸作品によって世人が患者の生活を知り其の苦悩に同情し、人格的握手を措ママしられないならばそれが彼等に取つて最大の慰安であり更生である（内田 1926b: 88）。

内田は、短歌が療養所に隔離されている患者たちと外部の人々をつなぐものと考えているのである。「私は毎日メスを執り注射器を握りつゝあるがその心は常に暗い」とは、当時有効な治療法がなかったハンセン病の療養施設で医師として働いていた内田の心情の告白である（内田 1926b: 88）。だからこそ、内田は「彼等の前に芸術の本態を説き、彼等の行くべき道を力説する時こそは実に明るい心を感じたのである（内田 1926b: 88）⁷⁾。

註

- 1) 明治、大正の年度については、たとえば、1888年〔明治21〕のように西暦のあとに和暦を示す。
- 2) 国立療養所菊池恵楓園のホームページの「施設の沿革」(<http://www.nhds.go.jp/~keifuen/enkaku.html>)を参照した。最終アクセス日2015年9月29日
- 3) 内田の尽力によって島田は2冊の歌集を遺すことになるが、それについては別稿にゆずる。
- 4) 1935年、九州療養所患者慰安会が河村の一周忌に刊行した『檜の蔭の聖父』という河村を偲ぶ書籍には、河村の南画が数点収められている。
- 5) MTLはMission to Lepersの頭文字をとったもの。日本MTLには、幹部として光田健輔が参加していた。後に、賀川は1937年に出版された熊本の回春病院のハンセン病患者隅青鳥の遺歌集『隅青鳥歌集』に序を寄せている。
- 6) ハンセン病患者でキリスト教に入信したものは少なからずおり、内田のこの発言は必ずしも妥当ではない。日本におけるキリスト教とハンセン病とのかかわりについては、荒井1996を参照のこと。
- 7) なるほど、短歌を詠むことによって安らぎを得た患者はいるに違いない。しかし、内田が言う「進むべき道」にはそのパターンナリスティックな態度が明らかであり、内田が考える理想の患者像が隠されているのである。内田が明石海人に見出した理想的な患者像につ

いては、松岡2015を参照のこと。

引用文献

荒井英子

1996『ハンセン病とキリスト教』岩波書店

荒井裕樹

2011『隔離の文学』アルス

馬場純二

2000「医官・内田守と文芸活動」『歴史評論』No. 656: 20-32

復本一郎

1995「吉岡禅寺洞 齋藤慎爾（他編）『現代俳句ハンドブック』雄山閣、p. 101

石井直三郎

1929「序」内田守人編『檜の影 第二集』檜の影発行所、pp. 3-4

石丸梧平 [1926] 1929「『檜の影 第一集』」内田守編『檜の影 第二集』檜の影発行所、
pp. 98-99

賀川豊彦

1929「序」内田守人編『檜の影 第二集』檜の影発行所、pp. 1-2

加藤七三

1926「跋」『檜の影 第一集』九州療養所檜の影会、pp. 36-38

1929「跋」『檜の影 第二集』檜の影発行所、pp. 91-92

1933a「熊本アララギ歌会」『アララギ』26 (1): 576-577

1933b「故会員石川孝君」『アララギ』26 (1): 631-632

河村正之

[1929] 1935a「檜の影一月号を祝して」下瀬初太郎編『檜の蔭の聖父』九州療養所患者慰安
会、pp. 43-45

[1930] 1935b「檜の影活字版初号を祝して」下瀬初太郎編『檜の蔭の聖父』九州療養所患
者慰安会、pp. 45-46

松田修

1981「銀器鏘然」『現代歌人文庫 中城ふみ子歌集』国文社、pp. 142-153

松岡秀明

2015「ハンセン病患者のライフヒストリーとしての短歌：明石海人の歌集『白描』につい
て」*Communication-Design* 14: 49-56

光田健輔

1940「序」内田守人『療養短歌読本』白十字会、pp. 1-3

宮崎草餅

1926「序」内田守（編）『檜の影 第一集』九州療養所檜の影会

大畑健治、尾形侑

1995「運座」尾形他（編）『俳文学大辞典』角川書店

齋藤瀏

1929「跋」『檜の影 第二集』檜の影発行所、pp. 89-90

下瀬初太郎（編）

1935『檜の蔭の聖父』九州療養所患者慰安会

内田守（内田守人）

1926a「序」内田守人編『檜の影 第一集』九州療養所檜の影会、pp. 4-5

1926b「卷末附記」内田守人編『檜の影 第一集』九州療養所檜の影会、pp. 87-89

1929「卷末附記」内田守人編『檜の影 第二集』檜の影発行所、pp. 93-97

1940『療養短歌読本』白十字会

1976『生れざりせば』春秋社

上田三四二

1959『アララギの病歌人』白玉書房